



技術に望まれる哲学

池田悦治*

82年という新しい年を迎えて、殊更に構える必要はありませんが、それでも長い間の習慣でしょうか、ちょっと昨年をふり返って見たくになりますし、今年こそはと力んでみたくもなります。

たまたま昨年の秋京都大学の福井先生が、わが国初めてのノーベル化学賞をお受けになることがきまったとき、同じ京都大学の田中美知太郎先生が、「哲学思想とも関係があるでしょうね。西田幾太郎や田辺元など独自の学を生み出した京大哲学の何等かの影響が学内にまだ流れているといえるのではないか……ちょっとけた外れのことを許す雰囲気が必要ですね。それが学問の自由でしょう。これを育む哲学があった。」と語っておられる記事を読んで非常な感銘をうけました。

わたくしは常々技術に思想をと呼びかけてきましたし、昨年亡くなられた湯川秀樹先生が、理論物理学に東洋哲学を導入されたことを非常の徳として称讃されているのを知って、ますますこの感を強くしております。

* 池田悦治 (Etsuji IKEDA), 社団法人生産技術振興協会理事長

わたくし達が、こんなにも誇りを持って日夜研究している技術が、真に人類の幸せに結果するためには、結局は、幸せとは何ぞやの哲理をふまえた技術者があって始めて可能でありましょう。

技術に哲学が入ってきますと当然に生産の方向が、単に経済原則だけでは定まらなくなって如何に人類の幸せに寄与するかを考えなければならなくなります。

恰も現代は、価値感が多様化の時代です。徒らに古いしきたりの線の上ばかりを歩む必要はありませんまい。曾っての一高の三谷教授が、卒業生に訓示されたという「自らの運命は、自らがつくるのだ、諸君二度とない一生だ、真実やりたいと思うこと、またやるに価値することをやるがいい、現代に欠けているものは財力でもない、知識でもない、現代に欠けているものは真実である、その誠実さから生れでるところの道徳的勇気である。」を想起し自らの哲学をもって存分の技術を究め等しく世界に祝福される生産の花を咲かそうではありませんか。